

〔共同研究：大阪都市圏における地域再開発と地域福祉に関する調査研究〕 (その3)

大都市における住民福祉の現況と問題点*

——福祉行政の専門家による討議の概要——

植 田 政 孝

福祉の問題は、心の中のとばりをあげて、暗闇の中に光を注ぎ、生あることを喜び、明日あることを信じるようになることによって、解決しえるのではないだろうか。

勿論、そのことは精神的条件だけで達成しえるものでもなければ、物質的な条件を整備することだけによって成就できるものでもない。物質的な条件と精神的な条件がうまく調和され、整備されて始めて可能となる。

しかも福祉の問題は、画一的な法律や行政で律しえない、きわめてパーソナルな性格を孕んでいるだけに、それぞれの生活実態に即し、生活心情に適合した対応が必要となる。

われわれ大学研究者は、この福祉問題のミクロの実態にうとい面があり、どうかすると観念的論議に走りがちである。そこで、われわれは自らの「世間知らず」を矯正し、自らの福祉認識を吟味するために、なが年福祉行政に携わってこられた有能なベテラン実務専門家の方々に集まっていただいて、大都市大阪における住民福祉の現況と問題点について討議していただくことにした。

以下はその時の討議の集大成を示す図式と、それに対するわれわれの若干のコメントである。

討議の日時	1977年3月17日(木)
	午後2時—6時
討議の場所	桃山学院昭和町学舎 C館会議室
討議参加者	福島区 3名 東成区 3名 平野区 2名 } 計8名
立 会 人	野々山久也 助教授 植 田 政 孝 助教授

コメント

1. 図式に示されている如く、討議中に指摘された問題点は広汎・多岐にわたっている。たとえば

- ① 職員研修, 人材確保の問題
- ② 福祉事務所の機能と役割
- ③ 行政責任の領域の問題
- ④ 福祉制度上の問題
- ⑤ 公害問題
- ⑥ 労働政策, 医療政策などの総合的施策の必要性
- ⑦ ボランティア, 住民運動の問題
- ⑧ 福祉と人間の生き方
- ⑨ 家族問題
- ⑩ 市民啓発, 福祉教育の問題
- ⑪ 保護者責任論

など、主要な論点だけで10項目以上に及んでいる。ベテラン行政マンならではの行き届いた目くばりである。

2. 技術的な問題や制度的な問題に拘泥することなく、日常の福祉実践の取り組みを通して、福祉哲学の確立を志向しておられることが、「福祉」と「生きがい」、「福祉」と「権利」などの関係を真剣に問いかけておられることから窺い知ることができる。

3. 児童, 老人, アルコール中毒者の例を挙げて、家族福祉の重要さが強調されている。家族は社会を構成する基本単位であって、その中でかなり長い間、安定した特定の間人間関係が形成される。定まった所に定まった人がいて、互

*本稿は、大阪市民生局から社会福祉研究奨励金をうけて行った研究の成果の一部である。

いが利害を超越した信頼関係で結ばれている、一つの共同体としての家族は、精神のより所として人に心の安心立命を与える。児童にとって老人にとって、この拠り所の果す役割はどんなに強調しても強調しすぎることはない。

行政介護の限界を知り、それ以前の家族保護の重要さを、実践を通して認識しておられる社会福祉の専門家のいつわらざる声といえよう。

4. 図式は木の構図で示されているが、その木の根幹に位置する問題点は、社会連帯のメンタリティと福祉教育の必要性である。

福祉はいかにあつて行政保護があろうと、社会に連帯のメンタリティが欠けていけば育たない。市民の高揚した福祉意識に支えられた連帯と協力がなければ、疎外され差別され生活困窮にあえいでいる社会的弱者を救い出すことはできないだろう。そういう意味で、福祉問題の根幹として、社会連帯感の高揚とそれを促がす福祉教育の必要性が指摘されているのは正鵠を得た議論といえよう。

5. ところで、この木の構図で示されたシエーマに異論がないわけではない。

まず第一の異論はデザインの仕方そのものにある。指摘された問題点は、相互に依存しあい補完しあう関係にあるものが多いにもかかわら

ず、左右対象の木という図形で表現されたために、その関係が描き切れていない。

例えば、社会連帯感の必要性の指摘と、安っぽい同情ボランティアへの苦言と、「障害者」への差別意識の弾劾とは、一般市民の福祉意識に関わる問題として、ともにきわめて近い距離にあるはずなのに、一つは根幹に、もう一つは右上隅の枝に、他の一つは左上隅の枝にと、バラバラに配置されている。

6. 第二の異論は問題点のグルーピングに若干の無理がみられることである。たとえば、「はき違えた権利意識」の見出しの中に、「福祉」と「生きがい」の関係を問う見解が含まれているが、この見解は行政としてどこまで福祉の問題を解決しなければならないのか、また解決しえるのか、という福祉あるいは福祉行政の原理的な問題であるだけに、「はき違えた権利意識」のグループより、もっと根幹に近いところへ下げるべきではなかっただろうか。

7. その他、見出しにもうひとつ工夫ほしかったものも若干ある。また環境問題や都市構造の改善の必要を指摘する意見が出なかったことも若干もの足りなさを感じる。さらにまた、市民のボランティア活動の成長にもっと期待する発言があってもよかったのではないだろうか。

